

仲仙寺古墳群



島根県安来市

はじめに この古墳群は、安来開発興業株式会社が住宅団地を造成するに先立って調査した。その結果古墳群の重要性が認識されるにいたり、各方面の協力によってその一部保存が決定し、昭和46年8月12日付けで史跡に指定された。調査は安来市教育委員会が主体となり、島根県文化財専門委員井上翁介、島根県埋蔵文化財調査員内田才、島根県教育委員会文化財保護主事近藤正の諸員によって、昭和45年7月1日から1ヶ月を費して実施した。その間、安来開発興業（福田房吉社長）、島根県教育委員会、地元各位のご協力があった。

位置 安来平野は島根県の東端部にあって西の松江、簸川両平野とともに出雲の三大穀倉地のひとつである。古墳群は平野の西部を流れる飯梨川下流域の左岸に伸びた標高50mの丘陵上にある。地籍は島根県安来市西赤江町字深廻824の1ほかである。もとこの丘陵には3群16基の古墳が点在したが、現存するのは史跡に指定された2基だけである。また附近の丘陵には東に宮山古墳(前方後方一消滅)、西北方に塩津古墳群(方墳)、荒鳥丘陵の造山古墳群、大成古墳(方墳)など4～5世紀代の古墳がある。

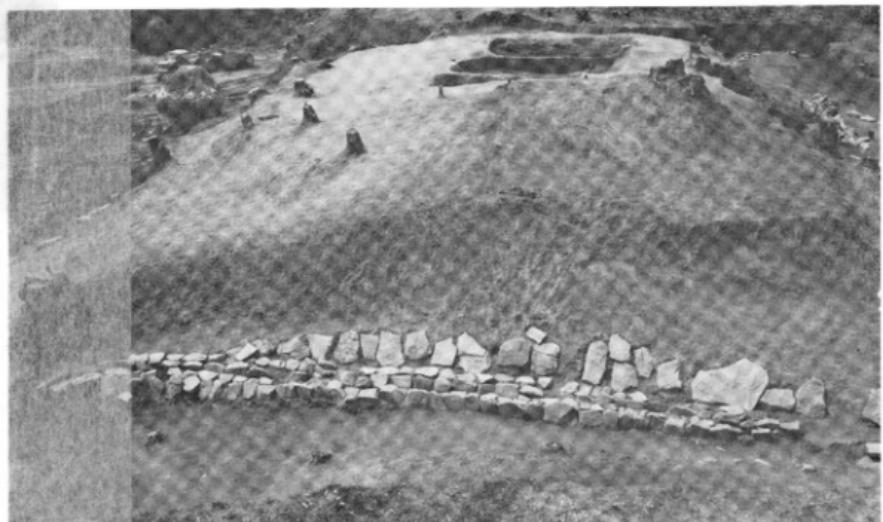
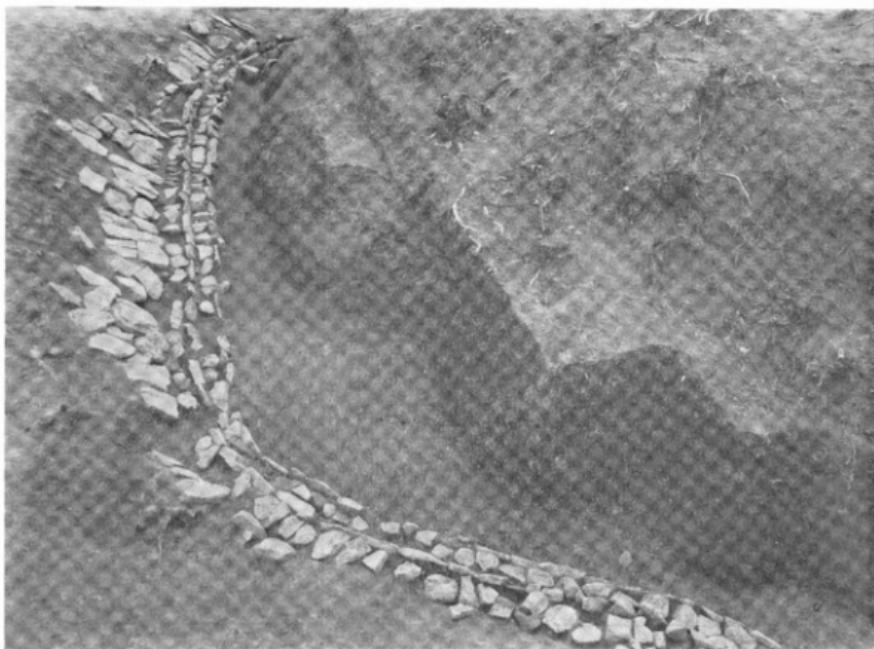


古墳群近景

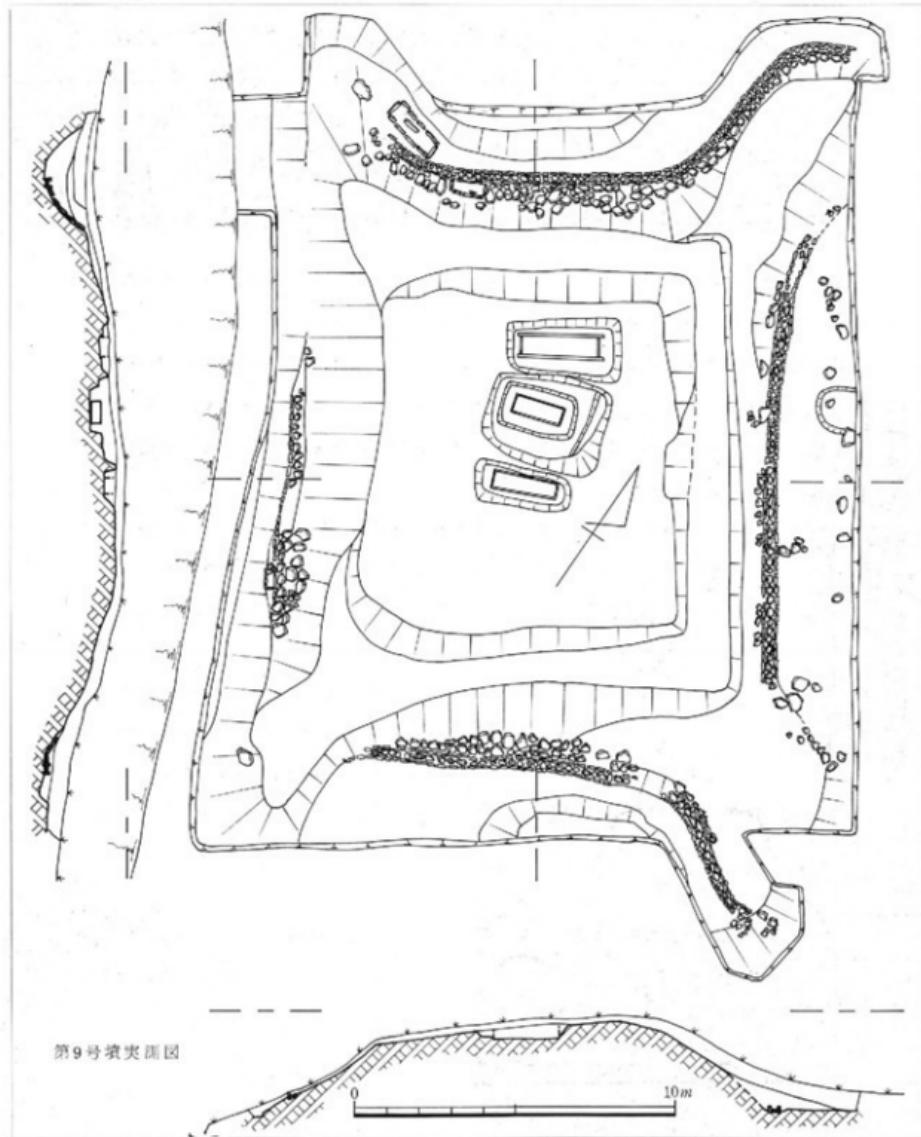


古墳群 古墳群は、ほぼ南北方向に延びる丘陵の尾根筋に並列している。この位置からは、北東に安来平野を望み、はるか東方には大山の靈峰を仰ぐ景勝の地を占める。南端のものを第8号墳、北端のものを第10号墳と仮称しており、現存するのは第8、

第九号墳全景

第九号墳
北西側石列と突起部

第9号墳の2基である。すなわち、第8号墳を起点として西北方約20mに第9号墳が営まれ、さらにこれより約30mにして第10号墳が位置している。そしてこれら3基の間は特別に造成された形跡はない。また、このほかに、消滅していった13基の古墳は東南側の丘陵にあった。



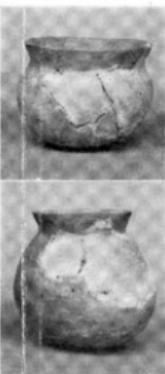


第8号墳 未発掘であるが、1辺の径約15m、高さ1.5mの方形墳。墳裾には板石が認められ、墳丘の西側斜面には土器片が認められている。

第9号墳 墳頂部の標高は38.5mある。墳丘は方形を示し、四隅に造出状の突起部をもっている。規模は一辺の径18~15mあって南北がやや長く、高さは約2mをはかる。墳丘の造成は、南北の両辺は丘陵を掘りこんで墳裾線を出し、東と西は自然丘を削り出している。したがって、盛り土はほとんどなかったとみてよい。墳頂部の平坦面は径10~9mの広さをもち、斜面には不明瞭ながら1段をつくっている。また墳裾には溝状の石列がめぐり、その石列から下段の斜面にかけては板石を貼りつけている。これはあたかも葺石の感がある。

遺骸の埋葬施設は、墳頂部に3個の墓壙を掘り、なかに木棺を納めたものである。中央の墓壙が最もはやすく掘られ、次いで北側の墓壙が中央の壁を一部分切ってつくられ、南側の墓壙もそれと前後して掘られたと考えら

れる。中央の墓壙は2段に分けて掘りこまれ、内部壙内に木棺を入れた後に砂をもってカバーするという入念な構造である。棺内には碧玉製管玉が副葬してあった。ほかの墓壙は壙底に砂を少量入れただけのものである。なお、



第9号墳 土器

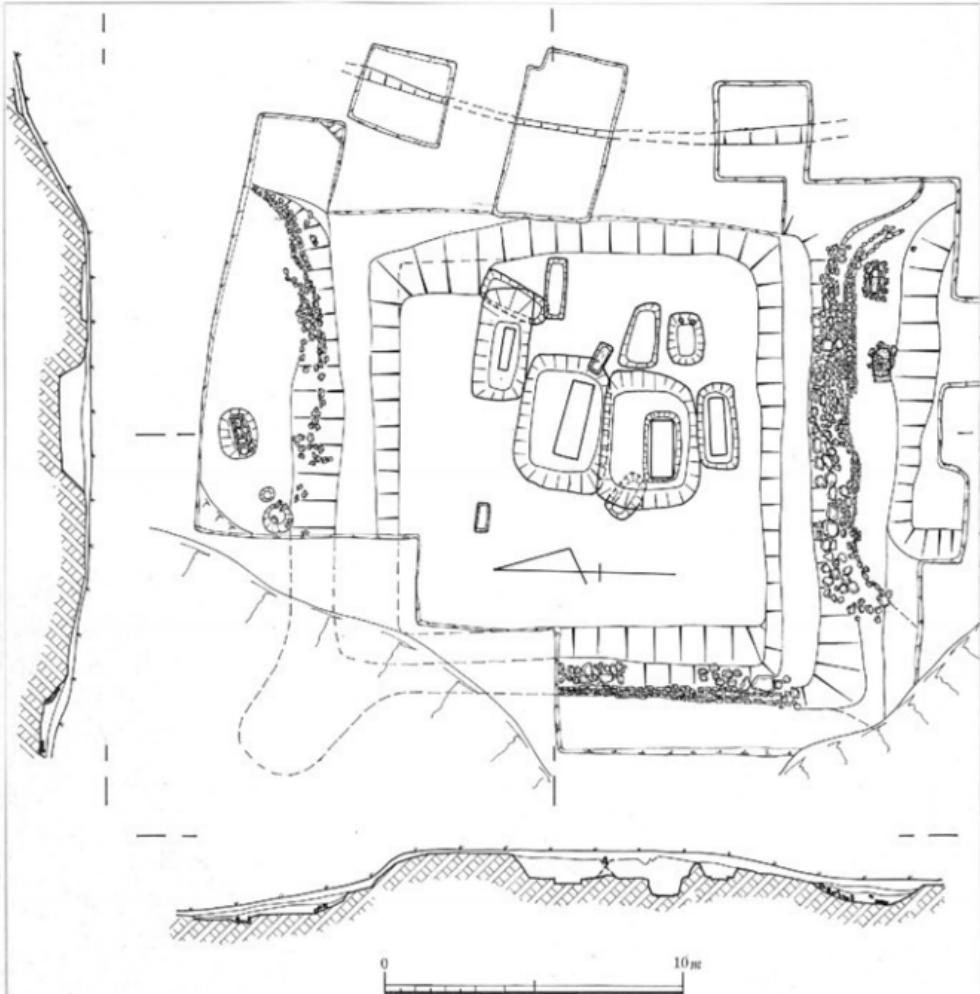


第9号墳 碧玉出土状況

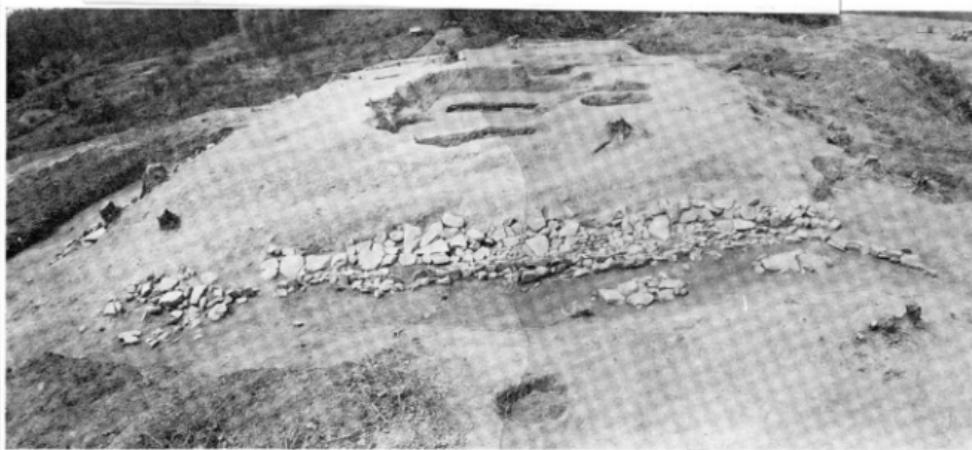
このほかに北側と西側の墳裾に3個の箱形石棺があって、そのうち2個は溝の側石をそのまま利用している。墳頂の主体部よりも時期が少し下るものと考えられる。

この墳丘における土器は、墳頂部の中央と墳裾にあったが、墳裾の土器の多くは上方から転落したものである。その器形は土師質の壺、甕、埴、高杯などである。

10号墳 第9号墳よりも約2m高い位置にあって、墳丘は方形を示し、第9号墳と同様な四隅に造出状の突起を設けている。墳丘の規模は、一边の径約18m、高さ約2



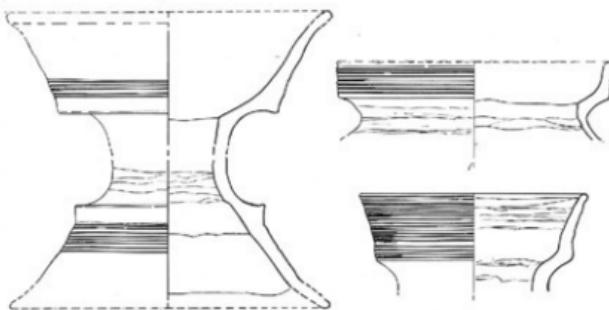
第10号墳実測図



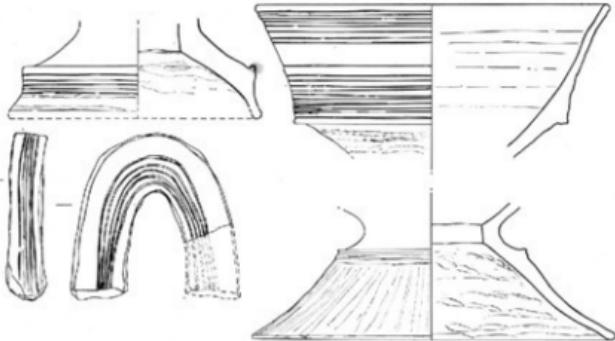
第10号墳 全景

出土した土器は、いずれも埋葬儀礼にともなう供獻用の土器であった。

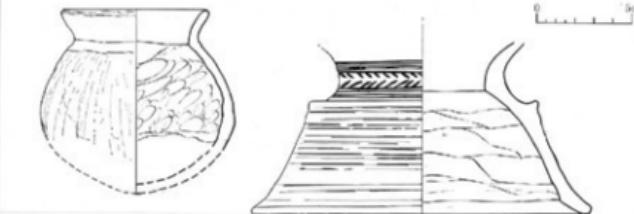
器台（写真下）の上に飲食物を入れた盞を載せ、あるいは高杯（写真中）の上にも葬送用食物が盛り供えられていたであろう。



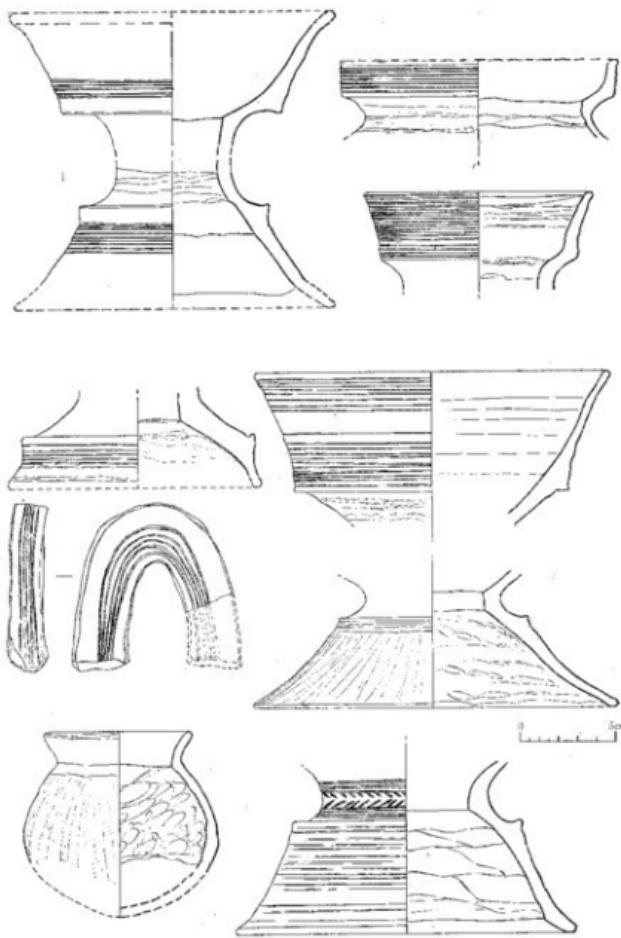
土器実測図（左列は第九号墳・右列は第十号墳）

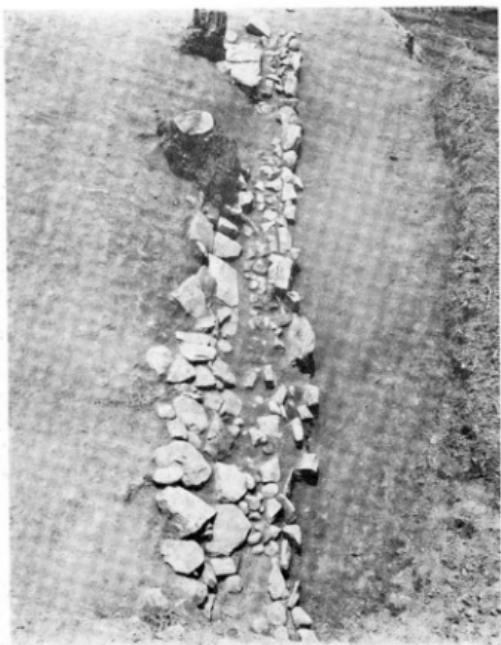


第十号墳
土器



土器実測図（左列は第九骨壙・右列は第十骨壙）





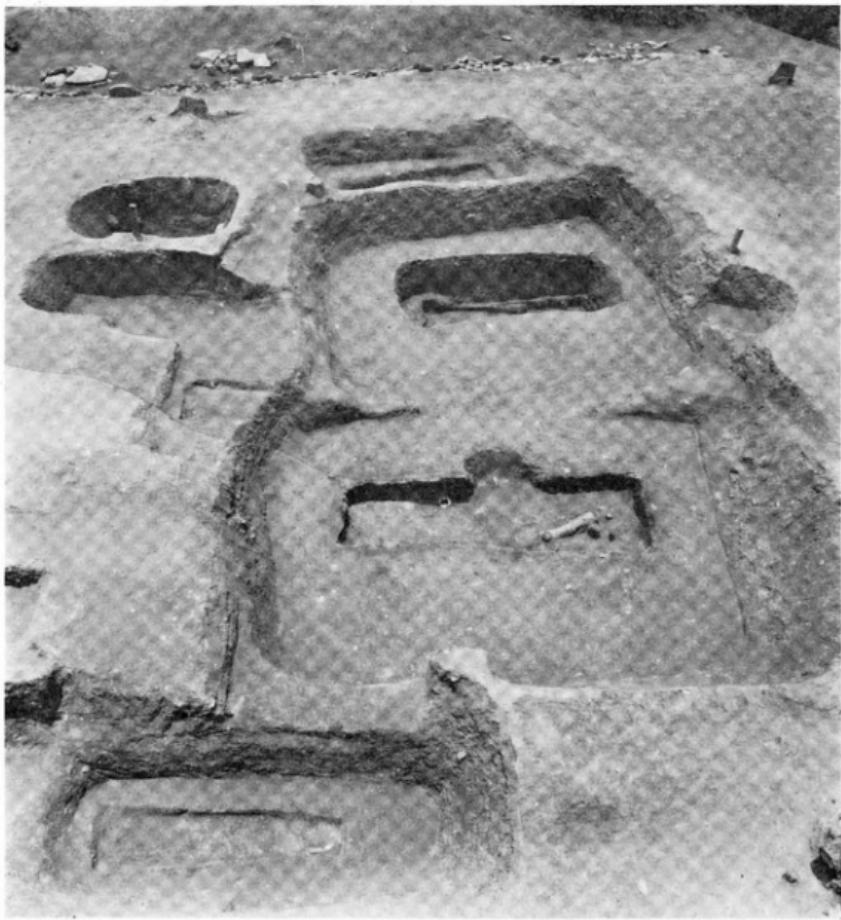
*m*をはかる。墳頂部の平坦面は、約12m四方の広さをもっている。四隅の突起は第9号墳ほどに精巧ではないが、西南隅の幅は4m近くある。墳丘構築の状況は、自然丘の最高部を利用して方形に削り出し、南北の両辺には1段をつくっている。東と西の両辺、ことに東側は急斜面をなして石材の使用は認められない。他の部分での石材使用方法は、第9号墳と同じく、墳裾線に沿ってあるいは北辺のようにわずかに斜面にくいこんで溝状の石

列があり、下段の斜面に貼り石をみせている。ただ、この場合に第9号墳ではまったく使用していない跡を多少とも含んでいるのが注意された。

この古墳の埋葬施設は、墳頂部に大小11個の墓壙が掘られている。すなわち、中央よりもやゝ南側に大形の墓壙2つを前後して掘りこみ、それより東側に向けて墓壙を



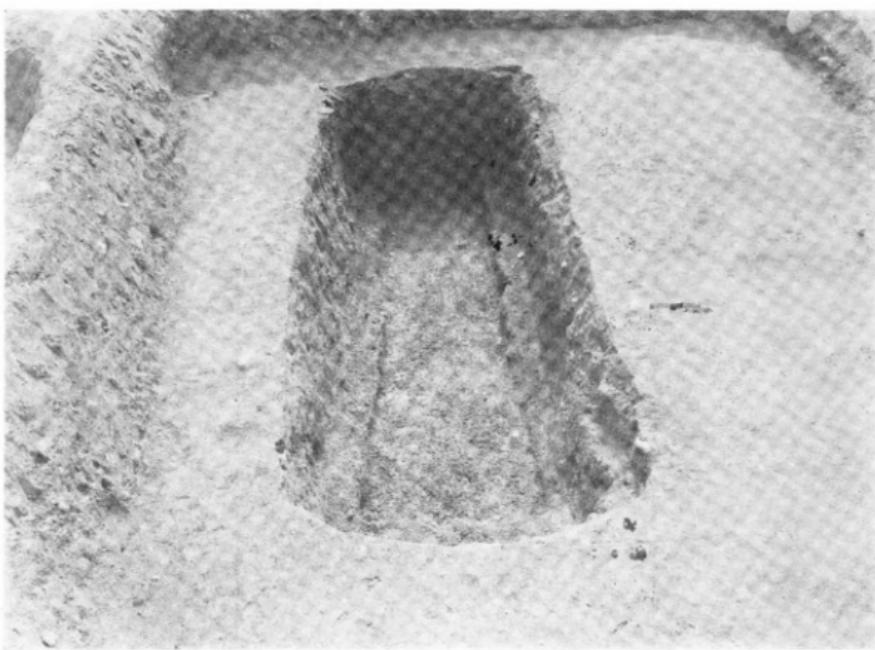
第十号墳
墓壙（複雑な切り合いを示す墓壙）



掘り進めていった状況を読みとることができよう。それはともかく、墓壙内の木棺が確認されたのは4個だけである。いずれも組合せ式の木棺であったろう。また、いまでもなくこれらの墓壙はみな同時期に掘られたものではなく、少なくとも8個の土壙に切り合い関係を認めることができあり、大まかであるが3期に分けられそうである。なお、このほか墳丘の南北両辺にも埋葬施設がある。南辺の溝内にあるものは西側が石蓋土壙、東側は組合式箱形石棺である。北辺のものもこれと同様であるが、蓋石が認められない。

なお、この墳丘では多数の土器が発見されている。発見された位置は、墳丘中央部

第十号墳 草塙（内部に組合せ木棺が残存していた）



に掘られた大形土壙の上面と南側の墳丘斜面であり、墳丘中央部のものが、よく全形を保っていたのに比較して斜面に認められたものはことさらに破壊された形跡をとどめており、その一部は溝中にも流れ落ちていた。



まとめ 古墳群のある安来平野は、奈良時代の行政区劃でいえば意宇郡にあたり、さらに野城駅（ぬきのうまや）に含まれていたと思われる。そして『野城』というのはこの土地に坐す『野城大神』の神名をとったものであるという。現在の安来市実松の丘陵に鎮座する式内能義神社と深いかかわりをもったこの神は、当地の土着の神と

して広く崇敬をあつめた安来平野の開拓神とでもいえようか。

伯太川、吉田川そして飯梨川によって沖積が繰り返された安来平野に農耕文化が開けるのは弥生時代の中期（西暦紀元前後約200年間）である。その後、弥生時代後期には周辺の丘陵にいちぢるしい数の集落が営まれるようになり、低い山丘上には、それぞれの墓地が造られるようになった。この墓地は土塚墓と呼ぶ丘陵の平坦部に長方形の墓壙を掘りこんで遺骸を埋葬したごく簡単なものであった。

ところが、西暦4世紀代になるとそれまでほとんど加工しなかった丘陵を、土塚墓を中心として方形ないし長方形に削り、なかには石列を設けたものが現われるようになった。仲仙寺古墳群は、まさにこのような弥生時代の土塚墓が完成された姿を示すとともに、次の世代に著しい発展を示す古墳の形をも備えているのである。そこに日本における古代国家胎動へのひとつの侧面をみることができよう。この古墳群に続くものは、宮山古墳や西北方の荒島造山丘陵の諸古墳などの前期古墳であるが、これらはみな安来平野を開拓していった族長の墳墓であることを思えば、古墳の属する時期なり分布状況によって、この地方における古代社会を再現することも可能であろう。その意味で、仲仙寺古墳群のもつ意義はきわめて大きいといえる。

後記 この小冊子は、見学者用として安来市教育委員会から、依頼を受けたものを井上利介、内田才氏と協議しながら近藤がまとめたものである。

昭和47年2月1日印刷

昭和47年2月5日発行

仲仙寺古墳群

編集 近藤 正

発行 安来市教育委員会
島根県安来市安来町

印刷 株式会社 報光社